

二〇〇九年二月二十二日 生と死

神から人へ、人から神へ。

人の命は 宇宙の命。個人の所有や権利にあらず。

人は命を宇宙より、肉体の中に与えられ、生まれし環境、時代の中に、それぞれ役目を与えられ。

なれば人は、命を頂き、己の役割、使命を果たす、それが当然の 務めなり。

人の命は 自由にあらず。生きる務めを負わされて、宇宙の進化の 一翼 担い、その繁栄を 進めるためなり。

生きるは義務なり。死も然り。

宇宙にとりては いずれも欠かせぬ、必要ありて与えし生なれ、最後の死をば 迎えるときまで、己の使命を 生きて果たせよ。

宇宙はひとつの 巨大な命。銀河に星雲、星の一つ、全てはそれぞれ 役目を持ちて、互いが互いを 生かす働き。

地球の上の 自然にも 山川草木、天地にも それぞれ意味あり、役割あり。

人には人の 役割あり。

自然の中に込められたる、神の願いを 見出して、神の恵みの 尊さを、讃え、祝いて、捧げること。

人に備わる 五感に靈性、他の動物との異なりを、真摯に 尊び、畏めよ。

目に見え、耳に 聞こえる全てに、神の慈愛を感じ取り、その感動を ことばに表わせ。

口は神への感謝と祈りを、ことばに表わし、発するためなり。

生死は一体、不可分にて、人の現世に 終わりはあれど、そもまた命の 円環の内。

死にて生は全うし、次なる生に 継がれてゆかむ。

人の生死は、偶然ならず。全ては神の 定めしままに。人の選択、勝手の余地なし。

人は己の 生を選べず。死もまた 宇宙の必然により、訪れ来たるものなれば、

人は 唯ただに従し容ようと、生の終りに 心を整ととのえ、死に臨のぞむ日の、備そなえをなすべし。

めでたき生を 終はえるため、人は命の限りにて、神の示しさる 道みちに従したがい、神のことばを標しるべとなして、生の与よえる困難を、御魂みたまの成長、昇華しょうかのための、尊とうとき課題と、喜よろこべよ。神から与よえし、数々の問とい。そこに答こたえるが、生きる意味。

答は一つにあらざれば、よりよき答を 返すべし。

よき答とは、よく生きること。

迷まよい、苦くるしみ、悩なやむ程、涙や汗を 流ながす程、答の光は 輝きらき強つよめむ。

神から頂たまく 最後の問といは、いかに死をば迎むかえるか。

死とは終わりの意味ならず。

肉体の持つ生は終われど、宇宙の命に 戻かえりゆき、宇宙の命の 一いっ部と返かえる。

宇宙の命を 豊とよかに富たかます、栄さかえの糧かてとなりませよ。

死しにし後のちにも、命は続つく。

大だいなる命に 融ゆう和わして、宇宙の進化に 貢こう献けんせむため。

宇宙は 命の根源なり。

そこより生まれし、さまざまの、動物 植物 人間は、全て 宇宙に 帰かえりませむ。

生あるうちに、命を高たかめ、さらにも富たかませて、宇宙に戻かえれよ。

神から預あずかる 御魂みたまなれ、穢けがれ曇くもりは 磨こき清きよめて、光る御魂を お返し申ませ。

一人一人が、神の尊ととき、祈いのちりを映うつす、鏡かがみとなれよ。

鏡は 平たいらに、磨こかれてこそ、神の祈いのちりを 正ただしく映うつさむ。

さにて、本日、生と死とを、別のことばで 教おしえたり。よく読み返し、御魂に聞きかせよ。さにて。